特116
704

三輪
安宅
東北
蝉丸
猩々

大

始

特116
704

大正
11. 4. 15
内交

三輪

概説

内十八巻ノ一

玄賓僧都、大和國三輪の山陰に住まひける折、毎日樒、閼伽の水を汲みて來る女あり。不思議に思ひて何所の者なるかと尋ねしに、三輪の山本の者なりといひ、秋も漸く末となりて夜寒を覺ゆれば衣一重賜はりたしと請へるまゝに、有合せたる衣を與ふれば女深く喜びて歸りゆきぬ。僧都こゝろみに山本に尋ね行きしに、二本の杉ありて衣かゝれり。近寄り見れば、一首の歌を金色の文字にて記しありて、杉の木蔭より妙なる聲聞え、三輪の神女體の姿まて現れ、三輪の名の起り、天の岩戸の事など語り、神樂を奏して夜も明くる頃、見えずなりけり。

此曲前ハ閑カニシツトリト謡ヒ後ハ優ニサラリト謡フヲ宜シトス

小書　素囃　彩色傳　替納　二段舞止メ　刻攻之次第　諸神樂　白式

役別	装束附
ワキ　玄賓僧都	角帽子　着附無地熨斗目又小格子ニモ　水衣　腰帯　扇　珠数　茶水衣後見ヨリ渡ス
前シテ　里女	面深井　鬘　無色鬘帯　着附摺箔　無色唐織着流　木葉持
後シテ　三輪明神	面増　鬘　色入鬘帯　風折烏帽子　着附摺箔　紫長絹　緋大口　腰帯　黒骨扇　後ニ幣

季	九月	曲柄	四番目 略脇能(略三番目)
所	大和國磯城郡三輪	稽古順	三級

三輪

世阿彌元清作

ワキ僧詞 これは和州三輪の山陰に住居する。玄賓と申す沙門にて候。さてもこの程いづくとも無く女性一人。毎日樒閼伽の水を汲みて来り候。今日も来りて候はゞ。いかなる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候

シテ女次第上
三輪の山もと道もなし。三輪の山もと道もなし。檜原の奥を尋ねん

サシ上
げにや老少不定とて。若あかなかに身の残り。幾春秋をか送りけん。あさましや予て事なくて徒に。うき年月を三輪の里に。住居する女にて候。さてもこの山陰に玄賓僧都とて貴き人の御入りある程に。いつも樒閼伽の水を汲みてまゐらせ候。今日も亦まゐらばやと思ひ候

ワキカヽル上
山頭に夜孤輪の月を戴き。洞口に朝一片の雲を吐く。山田守るそほづの身こそ悲しけれ。秋果てぬれば。訪ふ人もなし

シテ内
いかにこの庵室

のうちへ案内申し候はん。ワキウケテ案内申さんとはいつも来れる人か。シテカヽル上山影門に入つて推せども出でず。ワキ月光地に敷いて掃へども又生ず。シテワキ二人鳥声とこしなへにして老生と静かなる山居に。深き編戸を推し開き。かくしも尋ね切樒。罪を助けてたび給へ。上哥秋寒き窓の内。秋寒き窓の内。軒の松風うちしぐれ。木の葉かき敷く庭の面。門は葎や閉ぢつらん。下樋の水音も苔に聞えて静かなるこの山住ぞさびしき。

○小謡

シテ詞如何に上人に申すべき事の候。秋も夜寒になりぬれば。御衣を一重

賜り候へ　ワキ「易き間の事この衣をまゐらせ候べし　シテ「あら有難や候。さらば御暇申し候はん　ワキ「暫く。さてさて御身はいづくに住む人ぞ　シテ「わらはが住み家は三輪の里。山もと近き所なり。その上我が庵は。三輪の山もと恋しくはとは詠みたれども。何しに

われをば訪ひ給ふべき。なほも不審に思し召さば訪ひ来ませ　地「杉立てる門をしるしにて。尋ね給へと言ひ捨てて。かき消すやうに失せにけり　中入間

ワキ上歌「この草庵を立ち出でて。この草庵を立ち出でて。行けば程なく三輪の里。近きあたりか山陰の。松はしるしも

なかりけり。杉村ならかりたつある杉
垣は何處なるらん杉垣は何處なる
らん。不思議やなこれなる杉の二本
を見ればありつる女人に與へつる衣の懸
りたるぞや。寄りて見れば衣の褄に
金色の文字すわれり。讀みて見れば
歌なり。三つの輪は清く淨きぞ唐衣

くると思ふな取ると思はじ
後シテ女上 千早振神も願のある故に。人の値遇
に逢ふぞ嬉しき 不思議やなこれ
なる杉の木蔭より。妙なる御聲の
聞えさせ給ふぞや。願はくは末世の衆
生の願をかなへ。御姿をまみえ給はし
ませと。念願深き感涙に。墨の衣を

○小謡

漏すぞや、恥しながら神が姿、上人にまみえ申すべし。罪を助けてたび給へ。いや罪科は人間にあり。これは妙なる神道の、衆生済度の方便なるを、暫し迷ひの人心や。女姿と三輪の神。女姿と三輪の神。襅掛帯引きかへて。たゞ祝子が着す

なる烏帽子狩衣。裳裾の上に掛け。御影あらたに見え給ふかたじけなの御事や。〽それ神代の昔物語は末代の衆生のため。済度方便の事業。品々以つて世のためなり

シテサシ上
○サシ曲独吟
○切迄囃子

〽中にもこの敷島は、人敬つて神力ます。五濁の塵に交はり。暫し心の

○仕舞

足引の大和の国に。年久しき夫婦の者あり。八千代をこめし玉椿。変らぬ色を頼みけるに。されども此人。夜は来れども昼見えず。ある夜の睦言に。御身いかなる故により。かく年月を送る身の。昼をば何とて。玉の夜ならで通ひ給はぬと

脇能又ハ三番目ノトキハ[illegible]

不審多き事なりと。同じくはとこしなへに。契をこむべしとありしかば。かの人答へにいふやう。げにも姿は羽束師の。洩りて余所にや知られなん。今より後は通ふまじ。契も今宵ばかりなりと。懇に語れば。さすがに別の悲しさに。帰る所を知らんとて

環まとつけ裳裾まこれをとぢ
つけて跡をひかへて慕ひゆく「まだ
青柳の糸長く結ぶや早玉のおのが
力にさゝがにの糸くり返し行程に。
この山もとの神垣や。杉の下枝に
止りたり。こはそもあさましや。契り
し人の姿か。その糸の三わげ残りし

より。三輪のしるしの過ぎし世を語
るにつけて恥かしや。「げに有難き
御相好聞くにつけても法の道
なほしも頼む心かな「とても神
代の物語詳しくいざや現はし。かの
上人を慰めん「まづ岩戸のその初。
隠れし神を出さんとて八百萬の神遊。

ワカ上 これぞ神樂の始めなる シテ上 千早ぶる神樂
天の岩戸を引き立てて 地上 神は跡
なく入り給へば常闇の世と はやな
りぬ シテ 八百萬の神達岩戸の前
にてこれを歎き 神樂を奏して舞
ひ給へば 地上 天照太神その時に岩戸
を少し開き給へば 又常闇の雲
晴れて日月光り輝けば人の面
しろじろと見ゆる シテ上 面白やと神
の御聲の妙なる始めの物語り

○キリ 中 思へば伊勢と三輪の神 思へば伊勢
と三輪の神一體分身の御事 今
更何と岩座や その關の戸の夜
もあけ かく有難き夢の告さむる

○小謡

や名残なるらんさむるや名残なるらん。

安宅

概説　内十八巻ノ二

頼朝義經の仲不和となり、義經は辨慶以下一行十二人作り山伏となりて都を落ち、奥州へ下る由頼朝聞及び、國々に新関を設け、堅く山伏を選ぶ。加賀國安宅の関にては富樫の泰家をして之を守らしめける處に、義經の一行通りかゝりしかば、富樫之を怪みて留め遮らんとせり。義經の從者一同最早これまでなりとて暴力を以て突破せんとしたるを、辨慶押し止め、南都東大寺再建の勸進の爲めに下る者の如く言ひなして、勸進帳の文を讀み、辛くも通過を許されしが、富樫は之を心無き事に思ひ、酒を持たせて跡を追ひ、一同にふるまひ、辨慶は舞ひなどして虎口を脱れ、陸奥の國へ下りけり。

此曲丸テ確カリト手強ク謡フ但シ詞懸合ニ意ヲ用ユベシ

小書　延年之舞　瀧流之傳　杓擲

役別		装束附
ワキ	富樫泰家	梨子打烏帽子　白鉢巻　厚板　上下長直垂　込大口 小刀　扇
シテ	弁慶	兜巾　篠懸　着附厚板　縞水衣　白大口（紺大口ニモ） 腰帯　小刀　菊高珠数　扇
子方 並ニ ツレ	判官源義經 山伏九人	兜巾　篠懸　着附厚板　水衣　白大口 腰帯　小刀　菊高珠数　扇

季	二月	所	加賀國能美郡安宅
曲柄	四五番（略二番目）	稽古順	三級

安宅

小次郎信光作

ワキ富樫詞　確カリト手強ク

かやうに候者は。加賀の國富樫の何某にて候。さても頼朝義經御中不和にならせ給ふにより。判官殿十二人の作り山伏となつて奥へ御下向の由鎌倉殿聞し召し及ばれ。國々に新關を立てゝ山伏を確く

選み申せとの御事にて候ふずる間この処をば某承つて山伏をとゞめ申し候。今日も確く申しつけばやと存じ候。如何に誰かある

△狂言「御前に候。

ワキ「今日も山伏の御通りあらばこなたへ申し候へ

△狂言「畏つて候。

シテ弁慶 ツレ山伏九人 次第 上

「旅の衣は篠懸の。旅の衣は篠懸の露けき袖やしをるらん

サシ上「鴻門楯破れ都の外の旅衣日もはるばるの越路の末思ひやるこそ遥なれ

シテ上「扨御供の人々には

ツレ「伊勢の三郎駿河の次郎。片岡増尾常陸坊

シテ「弁慶は先達の姿となりて

ツレ「主従以上十二人。未だ

習はぬ旅姿猶の篠懸露霜と。
け分けそめていつまでの。限りも
いさや白雲の。都路の春ぞ急ぐ旅
時しも頃は二月の。時しも頃は
二月の。きさらぎの十日の夜月の
都を立ち出で。これやこの行くも
帰るも別れて。行くも帰るも別
れて。知るも知らぬも。逢坂の山
隠す。霞ぞ春の。恨めしき霞ぞ春
の恨めしき。波路遥々行く舟の
波路遥々行く舟の。海津の
浦に着きにけり。東雲早く明
け行けば。浅茅色づく有乳山
気比の海宮居久しき神垣や。松の

木目山、なほ行く前に見えたるは、杣山人の板取、河瀬の水の麻生津や、末は三国の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に着きにけり、花の安宅に着きにけり

シテ「御急ぎ候程に、これははや安宅の湊に御着きにて候、暫くこの処に御休みあらうずるにて候

子方「いかに弁慶

シテ「御前に候

子方「唯今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか

シテ「いや何とも承らず候

子方「安宅の湊に新関を立てて山伏を堅く選むとこそ申しつれ

シテ「言語道断の御事にて候ものかな、さてはおん下向

をなじて立てたる関となじ候。これハ
ゆゝしき御大事にて候。まづこの
傍にて暫く御談合あらうずる
にそ候。これハ一大事の御事にてハ
同。皆々心中のとほりを御意見御
申しあらうずるにてハ。我等が心中
に何程の事の候べき。たゞ打ち破

つて御通りあれかしとなじ候
暫く仰のごとくこの関一所打ち
破つて御通りあらうずる事易き
事にそ候へども。御出で候ハんずる
行末が御大事にて候。たゞ何とも
して無異の義が然るべからうずると
なじ候　子方サラリ　ともかくも弁慶がはからひ候へ

シテ（閑カニ）畏つて候。某きつと案じ出したる事の候。我等を始めて皆々につくい山伏にて候が。何と申しても御姿隠御座なく候間。このまゝにてはいかゞと存じ候。恐れ多き申し事にて候へども。御篠懸を除けられ。あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ。御笠を深々と召され。いかにもくたびれたる御体にて。我等より後に引きさがつて御通り候はゞ。なかなか人は思ひもより申すまじきと存じ候。

子方（サラリ）げにこれは尤もにて候。さらば篠懸を取り候へ。

シテ（閑カニ）畏つて候。いかに強力。

狂言 御前に候。

シテ 笈を持ちて来り候へ。

狂言「畏つて候。」

シテ「我が笈を御肩に置かるゝ事は。なんぼう冥加もなき事にて候。なきか。まづ我はさきへ行き関の様體を見て。眞に山伏を選むか又さやうにもなきか。懇に見て参り候へ。」

狂言「さらば御立ちあらうずるにて候。」

上「げにや紅は園生に植ゑても隠れなし

ツレ同「強力にはよも目をかけじと。御篠懸を脱ぎ替へて。麻の衣を御身にまとひ

シテ「あの強力が負ひたる笈を

子方「義經とつて肩にかけ

ツレ同「笈の上には雨皮肩箱とりつけて

子方「綾菅笠にて顔を隠し

ツレ同「金剛杖にすがり

子方「足痛げなる強力にて

同「よろよろとして

歩み給ふ御有様ぞ痛はしき

シテ詞 我等より後に引きさがつて御出であらうずるにて候ふ。さらば皆々御通り候へ

ツレ 承り候ふ

狂言 如何に申し候ふ。山伏達の大勢御通り候ふ

ワキ 何と山伏の御通りあると申すか。心得てある。なうなう客僧達これは関にて候ふ

シテ 承り候ふ。これは

南都東大寺建立のために国々へ客僧を遣はされ候ふ。北陸道をば此の客僧承つて罷り通り候ふ。まづ勧めに御入り候へ

ワキ 近頃殊勝に候ふ。勧めには参らうずるにて候ふ。さりながら、これは山伏達に限つてとめ申す関にて候ふ

シテ さてその謂はれは

ワキ さん候ふ頼朝義経

御中不和にならせ給ふにより。判官
殿は秀衡を頼み給ひ。十二人の
作り山伏となつて。御下向の由その
聞えある。國々に新関を立てゝ。山伏を
確く撰み申せとの御事にて候。さる
間この處をば某承つて山伏をとめ
申し候。殊にこれは大勢にて候間一人

も通し申すまじく候

シテ 閑カニ 詞 委細承り候。
それは作り山伏をこそ止めよと仰せ
出されて候ひつらめ。よも眞の山伏を止め
よとの仰せられ候まじ

狂言 いや昨日も
山伏を三人まで斬つたる上は

シテ カケテ手拍ク さて
その斬つたる山伏は判官殿か

ワキ カケテ手拍ク あら
むつかしや問答は無益。一人も通し

やすまじい上つは「シテ」さては我等をも
これにて誅せられんずるか「ワキ 確カリ」なか
なかの事「シテカヽテ手拍ク」言語道断かゝる不祥
なる所へ来かゝつて候ものかな。この上
は力及ばぬ事さらば最期の勤めを始め
て尋常に誅せられうずるにて候。皆々
近う渡り候へ「ツレ サワリ」承り候「シテカヽル上 手拍ク」いでいで最

期の勤めを始めん。それ山伏といつぱ役の
優婆塞の行儀を受け「ツレ同 サラリ」その身は
不動明王の尊容をかたどり「シテ 手拍ク」兜巾と
いつぱ五智の宝冠なり「ツレ同 サラリ」十二因縁の
ひだをすゑて戴き「シテ 手拍ク」九会曼荼羅の
柿の篠懸「ツレ サラリ」胎蔵黒色の脛衣をと
はき「シテ 手拍ク」さてまた八目の草鞋は「ツレ サラリ」八葉

の蓮華を踏へたり、シテ出つる息は
阿吽の二字を称へ、ツレ同即身即仏の
山伏をこゝにて討ちとめ給はん事、シテ
明王の照覧計り難う、熊野権現
ツレ同の御罰を当らん事、ツレ同立所に於いて
シテ疑あるべからず、ツレ同唵阿毘羅吽欠と
数珠さらさらと押しもめば、ワキ近頃殊

勝なりさて先に申しつる南都東
大寺の勧進と仰せ候間定めて勧進
帳の御座なき事は候まじ、勧進帳を
あそばされ候へ、これにて聴聞申さう
ずるにて候、シテ何と勧進帳を読めと
候や、ワキなかなかの事、シテ心得申して候。
○独吟 勧進帳 ○固より勧進帳はあらばこそ笈の中

より往来の巻物一巻取り出し。勧進
帳と名づけつゝ高らかにこそ讀み上
けれ。それつらつら惟れは大恩
教主の秋の月は涅槃の雲に隠れ
生死長夜の長き夢驚かすへき人
もなし。こゝに中頃帝おはします。御
名をば聖武皇帝と名づけ奉り最

愛の夫人に別れ。戀慕やみがたく。涕
泣眼に荒く。涙玉を貫く思ひを善途
に飜して盧遮那佛を建立す。かほと
の靈場の絶えなん事を悲しみて。俊
乗坊重源。諸國を勧進す。一紙半
銭の奉財の輩は。この世にては無比
の樂に誇り當來にては。數千蓮

華の上に坐せん歸命稽首敬つて
白すと天も響けと讀みあげたり。
ワキ上 関の人々肝を消し 同 恐れをなして
通しけり恐れをなして通しけ
り ワキ詞 急いで御通り候へ シテ詞 承り候
狂言 なふなふ申し上候。判官殿の御通り候
ワキ カヽツテ手強ク いかにこれなる強力とまれとこそ

ツレ同上 拍子不合ハズ すはわが君を怪しむるは。一期の浮沈
極まりぬと皆一同に立ち帰る
シテ詞 気ヲカケ手強ク あら暫くあわてゝ事を仕損ずな。や
あ何とてあの強力は通らぬぞ
ワキ あれはこなたより止めて候 シテ それは
何とて御止め候ぞ ワキ あの強力が
ちと人に似たると申す者の候程に。

さてとめて候よ　（シテ詞カヽリ）何と人が人に似た
るとや珍しからぬ仰せにて候。さて（気ヲカヘ）
誰に似て候ぞ　（ワキサラリ）判官殿に似たると
申す者の候程に落居の間留めて候
（シテカケテ　気ヲカケ）や言語道断。判官殿に似申したる
強力めは一期の思ひ出な。（気ヲカヘ）腹立や日
高くは能登の国まで指さうずる

と思ひつるに。僅の笈負うて後にさ
がればこそ人も怪しむれ。総じてこの
程憎し憎しと思ひつるに。いで物
見せてくれんとて。金剛杖をおつ
取つて散々に打擲す。通れとこそ。
（ツレ同　中ノ拍サラリ）や笈に目を懸け給ふは盗人ざうな
（拍子三合）かたがたは何故に。かたがたは何故に。

かほどいやしき強力に。太刀かたなを抜き給ふは。目だれ顔の振舞は。臆病の至りかと。十一人の山伏は。打刀抜きかけて。勇みかかれる有様は。いかなる天魔鬼神も。恐れつべうぞ見えたる

ワキ「近頃誤りて候。はやはや御通り候へ

シテ「さきの関をばはや抜群に隔たりて候間。この所に暫く御休みあらうずるにて候。皆々近う御参り候へ。いかに申し上げ候。さても只今はあまりに難儀に候ひし程に。不思議の働きを仕り候事。これと申すに君の御運。盡きさせ給ふにより。今弁慶が杖にも当らせ給ふと思へば。いよいよ

あさましうこそ候へ。さても悪しくも
心得なしなず。いかに弁慶。さても唯今
の機転更に凡慮よりなす業にあ
らず。ただ天の御加護とこそ思へ。関の
者どもも我を怪しめ。生涯限りありつる
所に。とかくの是非をば争はず
してただ真の下人のごとく。散々に
打つて我を助くる。これ弁慶が謀に
非ず。八幡の御託宣かと思へば忝く
ぞ覚ゆる。それ世は末世に及ぶといへ
ども。日月未だ地に落ち給はず。
縦令如何なる方便なりとも。まさしき
主君をおつ杖の。天罰にあたらぬ事や
あるべき。げにや現在の果を見て

○サシ曲独吟
○切迄囃子

過去未来を知ると云ふ事、今に知ら
れて身の上に憂き年月の二月や、
下の十日のけふの難を遁れつるこそ
不思議なれ。たゞさながら十余人、
夢の覚めたる心地して互ひに面を
合はせつゝ、泣くばかりなる有様かな。

クセ 然るに義経、弓馬の家に生れきて、
命を軽んじ朝にあり。屍を西海の波に
沈め、山野海岸に起き臥しあかす
武士の鎧の袖枕、かたしく隙も波の
上、ある時は舟に浮み、風波に身を任せ。
ある時は山脊の馬蹄も見えぬ雪の中に
海少しある夕波の立ち来る音や、
須磨明石のとかく三年の程もなく。

敵を亡し、あひく世の。その忠勤も徒
に。なりはつるこの身の、そも何と
いへる因果ぞや、げにや思ふ事。叶
はねばこそ憂き世なれど、知れども
さすがなほ。思ひかへせば、梓弓の。直
なる人は苦みて、讒臣は。いやましに世
にありて。遼遠東南の雲を起し

西北の雪霜に。責められ埋る憂
き身をことわり給ふべきあるまたゞ
世には神も。佛もましまさぬかや。
恨めしの憂き世や。あら恨めしの憂
き世や。

ワキ詞　如何に誰かある

狂言　△御前に候

ワキ　さても山伏達に聊爾を申して。
あまりに面目もなく候に。追つ付き

申し酒を一つ参らせうずるにてあるぞ。此の先へ行きて留め申し候へ

狂言「畏つて候。いかに申し候。先には聊爾を申して。あまりに面目もなく候ひて。関守のこれまで酒を持たせて参られて候。

シテ「客僧達への事。やがて御目に懸からうずるにて候。

狂言「げにげには

○囃子 ココヨリモ

これも心得たり。人の情の盃に。受けて心をとどめんとや。これにつけても人々に。心なくれそ呉織。怪しめらるな人々と。弁慶に諫められて。この山陰の一宿りに。さらりと円居して。所も山路の菊の酒を飲まうよ

シテ「面白や山水に。面白や山水に。盃を浮

めでゝ流に浮かむ曲水の。手まづ
遮る袖ふれて。いざや舞をまはうよ。
固より辯慶は。三塔の遊僧。舞延
年の時の若これなる山水の。落ちて
巌に響くこそ　鳴るは瀧の水

シテ詞　たゞ酔ひては狂に。先達はお酌にまゐ
らうずるにては　ワキ　さらばたべ候べし。

とてもの事に先達一さし御舞ひ候へ

地　鳴るは瀧の水　男舞

シテワカ上　鳴るは瀧の水日は照るとも絶
えずとうたり。絶えずとうたりとく
とく立てや。手束弓の。心ゆるすな。
関守の人々。暇申してさらばよと
て。笈をおつ取り。肩に打ち懸け。

○仕舞

虎の尾を踏み毒蛇の口を遁れたる心ちして。陸奥の國へぞ。下りけ

ラ

る。

東北

概説

内十八巻ノ三

東國方より出でたる僧都に上り、東北院に赴きしに、由ありげなる女に會ふ。女は和泉式部の植ゑ置きしといふ軒端の梅並に式部のゐたる庵室を教へ、古事を語りたる末、我こそ梅の主よと言ひすて、黄昏の花の木蔭に姿を隠せり。僧讀經して曉近くなりし頃、和泉式部とおぼしき女現れ、東北院の由來など語り、舞を舞ひ、花は根に鳥は古巣に歸るとて、庵室に入ると見て僧の夢はさめぬ。

此曲古ヘハ軒端梅ト云ヘリ総シテ品能ク聞カニ謡フヲ旨トスベシ

役	別	装束附
ワキ	旅僧	角帽子　着附無地熨斗目　水衣　緞子腰帯　扇　珠数
ワキツレ	従僧　二人	角帽子　着附無地熨斗目　水衣　緞子腰帯　扇　珠数
前シテ	里女	面深井、若女ニモ　鬘　鬘帯　着附摺箔　唐織着流　葛扇
後シテ	和泉式部	面深井、若女ニモ　鬘　鬘帯　着附摺箔　長絹紫　緋大口　箔腰帯　葛扇

季	正月	曲柄	三番目（葛物）
所	京都東北院	稽古順	四級

東北（トウボク）

世阿彌元清作

ワキ僧 ワキツレ二人 次第上 拍子ニ合（閑カニ）

年立ち帰る春なれや。年立ち帰る春なれや。花の都に急がん

ワキ詞（閑カニ）これハ東國方より出でたる僧にて候われ未だ都を見ず候程にこの春思ひ立ち都にのぼり候

道行 三ノ上（閑カニ）春たつや霞の関を今朝越えて。霞の関

を今朝越えて。果ハありけり武蔵
野を分け暮しつゝあと遠き山又
山の雲を経て都の空も近づくや。
旅までのどけかるらんく旅までのど
けかるらん　ワキ　急ぎ候程にこれハはや
都に着きて候。これなる梅を見れハ
今を盛と見えて候。いかさま名の
なき事ハ候まじ。このあたりの人に尋
ねばやと思ひ候。さてもこの梅ハ和泉式
部と申し候ぞや。暫く眺めばやと思ひ候
シテ女　なうなう。あれなる御僧。その梅をと
人に御尋ね候へぞ。何と教へまゐらせ
てハ候ぞ　ワキ　さん候人に尋ねて候へバ。
和泉式部とこそ教へ候ひつれ　シテ　いや

きやうにはいふべからず。梅の名のみか好
文木又は鶯宿梅なんどこそやさしけ
れ。知らぬ人の申せることにて用ひ給ふ
べからず。この寺いまだ上東門院の
御時。和泉式部この梅を植ゑ置き。
軒端の梅と名づけつゝ目かれせず
眺め給ひしとなり。ほどこそ好みある花の

縁に。御経をも読誦し給はゞ。逆縁
の御利益ともなるべきなり。これにて
和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅
にて候へ「ワキ サラリ「さては和泉式部の植ゑ
給ひし軒端の梅にて候ひけるぞや。
又あの方丈は和泉式部の御寝所にて
候か「シテ ウケテ なかなかの事和泉式部の臥所

ありしと。造りも更へずそのまゝにて。今は絶えせぬながめぞかし

ワキカヽル上「不思議やさては古への。名を残し置く形見とて。

シテ「花も主を慕ふかと。年々色香もいやましに。

ワキ「さもみやびたる御氣色。

シテ「なほも昔を。

ワキ「思ふかと

○小謡 拍子ニ合 上歌 同「年月と古き軒端の梅の花。古き軒端の梅の花。主と知れば久方の。天ぎる雪のなべて世に。聞えたる名残りかや。和泉式部の花心。

ロンギ上「げにや古を。聞くにつけても思ひ出の。春や昔の春ならぬ。我が身ひとりぞ心なき

シテ上「ひとりとも。いさ白雪の古事と。誰に問はまし道芝の。露の世にはなけれども

この花に住むものを。
地上「そもこの花に住むぞとよ。散るか花鳥の
シテ「同じ道にて帰るさの。
地「さきだつあさか
シテ「花の陰にやすらふと見えしまゝに。われこそ梅の主よと。夕ぐれなるの花の陰に。木隠れて見えざりき木隠れて見えずなりにけり

中入間

ワキ上哥 三人待謡「夜もすがら。軒端の梅の陰に居て。軒端の梅の陰に居て。花も妙なる法の道。迷はぬ月の夜と共に。この御経を讀誦する。この御経を讀誦する。

後シテ女中 一声 拍子ニ合ハズ「あら有難の御経やな。あら有難の御経やな。唯今讀誦し給ふは。譬喩品よなう。思ひ出でたり閻浮

の有様。この寺まだ上東門院の御時。
御堂の関白この門前を通り給ひ
しが。御車のうちにて法華経の
譬喩品を高らかに読み給ひしを。
式部この門の内にて聞き。門の
外。法の車の音聞けど。われも火
宅をば。出でざりけるかなと。かやうに詠みし

ことばの末から思ひ出でられてぞや
げにげにこの歌は。和泉式部の詠歌
ぞかし。田舎までも聞き及びしあり。
さては詠歌の心の如く。火宅をば
はや出で給へりや　なかなかの事
火宅は出でぬさりながら。詠み置く
歌舞の菩薩となりて　なほこの

寺にすむ月の出づるは火宅
ワキ「今ぞ　シテ「すでに三界無安の内をも
去りて、三つの車に法の道すぐなるや火
宅の門しと今ぞ。和泉式部が成等正
覚を得るぞ有難き
地「それ和歌と
いつぱ法身説法の妙文たり、たま
たま後世をしらざる者は、たゞ和歌の
夜ありし貫之もこれを書きたる、
○サシ 曲独吟
○切迄 囃子
あり。かるが故に天地を動かし鬼神
を感ぜしむる事業、神明佛陀の
冥感に至る、殊に時ある花の都雲居
の春の空までも、のどけき心を種
として天道にかなひ、詠ぜうたり
クセ 中
○仕舞 拍子ニ合
所は九重の、東北の霊地にて、王城の

鬼門を守りつゝ惡魔を拂ふ雲水の
水上の山陰のかも川や。末白川の
波風も。いさぎよき響の常樂の縁
をなすとかや。庭には池水をたゝへつゝ
鳥は宿す池中の樹。僧は敲く月
下の門。出で入る人跡數々の。袖を連
ね裳裾を染めて色めく有樣の。げ

にげに花の都なり。「見佛聞法の數
々。順逆の縁はいやましに。日夜朝
暮に懈らず。九夏三伏の夏たけ
て秋暮れけりと驚かず。閑庭の松
の風一聲の秋を催して上求菩
提の機をみせ。池水に映る月影の下化
衆生の相を得たり。東北陰陽の時

節もげにと知られたり、〽春の夜の 序之舞

シテワカ上〽春の夜の。闇はあやなし。梅の花

地中色こそ見えね。香やは隠るゝ。香やは

隠るゝ香やは隠るゝ。

○仕舞

シテ中〽げにや色に

そみ香にめでし昔を〽よしやかの今

更に。思ひ出れば。われながら懐か

しく。恋しき涙を遠き人にもら

さんもはづかし。暇申さん、シテ中〽これまで

ぞ花の根に〽今はこれまでぞ花は

根に。鳥の古巣に帰るぞとて。方丈の

燈火を。火宅とや。なほ人は見ん。

こゝぞ花の臺に和泉式部が臥

所よとて。方丈の室に入るとみえ

し、夢は覚めにけり夢の覚

めて失せにけり。

蟬丸

概説

内十八巻ノ四

延喜第四の皇子に蟬丸の宮といへるあり、幼少より盲目になり給へるを、前世の戒行の善からぬ爲めなればとて、逢坂山に捨て、其罪障を消滅させんとの叡慮により、大納言清貫蟬丸を彼の山に伴ひ、庵を造りて住はせけるが、蟬丸は琵琶を好み、常に彈じて心を遣りけり、茲に蟬丸の姉なる逆髪の宮といへるが、時々心狂ひ、宮中を狂ひ出づる事あり。今しも花の都を立出でゝ逢坂山に來り、ゆくりなくも弟宮と對面し、互に其の身の上を歎きたる後、泣く〳〵別れけり。

此曲ハ心持緩急ニ心シテ謡フベシ

小書　替之形

役別		裝束附
ツレ	蟬丸	面蟬丸、弱法師ニモ　喝食鬘　着附厚板　水衣　單狩衣　指貫　込大口　腰帯　扇　物着ニ角帽子
ワキツレ	輿昇二人	着附厚板　白大口　腰帯　輿昇ク
ワキ	勅使	風折烏帽子　着附厚板　長絹　白大口　腰帯　扇
シテ	逆髪	面増　鬘　鬘帯　着附摺箔　色入唐織着流（右肩脱グ）　葛扇

季	八月	曲柄	四番目（略三番目）
所	近江國滋賀郡逢坂山	稽古順	二級

蟬丸

世阿彌元清作

ワキ清貫　ワキツレ二人　次第上　拍子ニ合

定なき世の中なかなかに。定なき世の中なかなかに。憂き事や頼なるらん。

ワキカヽル上　拍子合ハズ

これは延喜第四の皇子。蟬丸の宮にておはします。げにや何事も報ありける浮世かな。前世の戒行いみじくて今皇子と

なり給へども。襁褓の内よりなど、やらん両眼盲ひましまして。蒼天に月日の光なく。闇夜に燈火暗うして五更の雨もやむ事なし、明し暮させ給ふ所に。帝如何なる叡慮やらん密に具足し奉り。逢坂山に捨て置き申し御髪を

おろし奉れとの。綸言出でゝかくならねば。御痛はしさ限なけれども。勅諚なれば力なく。足弱車忍路を。雲居のよそに廻らして。東雲の空も名残の都路を。空も名残の都路を。今日出でゝ初ていつか。帰らんこともかた糸の。よるべなき

身の行方。さなきだに世の中は。浮木
の亀の年を経て。盲亀の闇
路たどり行く。迷の雲も立ちのぼる
逢坂山に着きにけり逢坂山に
着きにけり ツレ蝉丸詞「いかに清貫 ワキ「御
前に候 ツレ「さてわれをばこの山に捨
て置くべきか ワキ「さん候宣旨にて候

程に。これまで御供申して候へども。
いづくに捨て置き申すべきやらん。
カヽル上 拍子ニ合ハズ
さるにても我が君は。堯舜より
この方。国を治め民を憐む御事
なるに。かやうの叡慮の何と申し
たる御事やらん。かゝる思もよらぬ
事の候はゞ、ツレ詞「あら愚の清貫が

いひ事やな。固より盲目の身と
生る事。前世の戒行拙き故なり。
されば父帝も山野に捨てさせ給ふ
事。御情なきに似たれども。この
世にて過去の業障を果し。後の
世を助けんとの御謀。これこそ眞の
親の慈悲なれ。歎くまじの

勅諚やな 宣旨にてはなきよ。御
髪をもおろしなり候
何といひたる事ぞ これは御出家
にてめでたき御事にてわたらせ
給ひは げにや香鬟髻を切り。
半檀に抛すし。唐土の西施が申
しけるも。かやうの姿にてありける

ぞや　ワキ中「この御有様にては。なかなか道人の怨みもあるべければ。御衣を賜つて蓑と云ふものを参らせ上げ候　ツレ上「これは雨による田蓑の島と詠み置きつる。蓑と云ふものか　ワキ詞「又雨露の御為なれば。同じく笠を参らする　ツレ上「これは御侍。御笠と申

せと詠み置きつる。笠といふものよなう　ワキ詞「又この杖は御道しるべ。御手に持たせ給ふべし　ツレ上「げにげにこれもつからよ。千歳の坂をも越えなんと。かの遍照が詠みし杖か　ワキ「それは千年の栄行く杖　ツレ「これも逢坂山の。ワキ「関の戸ざしの藁屋の竹の

○小謡

ツレ「杖柱とも頼みつる、ワキ「父帝には、
ツレ「捨てられて。上「かゝる浮世に逢坂の。
知るも知らぬもこれ見よや。延喜の
皇子のなり行く果ぞかなしき。
地「行人征馬の数々に、上り下りの旅衣
袖をしほりて村雨の、ふり捨て
がたき名残かな、ふり捨てがたき

名残かな。さりとては、いつを限りに
有明の、つきぬ涙を押へつゝ、はや帰る
さになりぬれば、皇子は跡にたゞ一人、
御身に添ふ物とては、琵琶を抱き
て杖を持ち、臥しまろびてぞ泣
き給ふ、臥しまろびてぞ泣き給ふ。

シテ女サシ上 一声 拍子ニ合ハズ
「これは延喜第三の皇子。逆髪とは

我が事なり。われ皇子とはいはれども、いつの因果の故やらん、心より狂乱して辺土遠境の狂人となつて、緑の髪は空さまに生ひのぼつて撫づれども下らず。なふあれなる童どもは何を笑ふぞ。何我が髪の逆さまなるがをかしいとや。げに逆さまなる事はをかしいよな。さては我が髪よりも汝等が身にてわれを笑ふこそさかさまなれ。面白し面白し。これらは皆人間目前の境界なり。それ花の種は地に埋もつて千林の梢にのぼり。月の影は天にかかつて萬水の底に

沈む。これらをば皆いづれか順と見ん逆ありと言はん。われは皇子なれども庶人にくだり。髪は身上より生ひのぼつて星霜を戴く。これ皆順逆の二つなりおもしろや

地 柳の髪をも風は梳るに

シテ 風にも解かれず手にも分けられず

○独吟
○仕舞

地 かなぐり捨つるみての袂。

シテ 抜頭の舞かや浅ましや。

地 花の都を立ち出でて。花の都を立ち出でて。憂き音に鳴くか加茂川や。末白河をうち渡り。粟田口にも着きしかば。今は誰をか松坂や。関のこなたと思ひしに。後ろに有るや音羽山の

名残惜しの都や。松虫鈴虫きり
ぎりすの。鳴くや夕陰の山科
の里人もとがむなよ。狂女なれど心は
清瀧川と知るべし。逢坂の関の
清水に影見えて。今やひくらん
望月の。駒の歩みも近づくか。水も
走井の影見れば。われながら浅ま
しや髪はおどろを戴き。黛も乱
れ黒みて。げに逆髪の影うつる。水
を鏡と夕波の。うつゝなの我が姿や。

ツレサシ上 用中三 胡カニ
拍子合ハズ

第一第二の絃はさくさくとして秋
の風。松を払つて疎韻落つ。第三
第四の宮は。われ蟬丸が調も四つ
の。をとりからありける村雨かな。あら

心凄の夜すがらや。なほ世の中にはとて
もかくてもありぬべし。宮も藁屋も
果しなければ。不思議やなこれ
なる藁屋の内よりも。撥音気高
き琵琶の音聞ゆ。そもそもこれ程の
賤が家にもかかる調のありけるよと。
思ひよつけてなほやらん。学よなつか
しき心ちして藁屋の雨の足音
もせでひそかに立ちより聞き居
たり。誰そやこの藁屋の外面に
音するは。この程折々訪はれつる博
雅の三位にてましますか。近づき
声をよくよく聞けば。弟の宮の声
ありけり。なう逆髪こそまゐりたれ。

蝉丸の内にましますか　ツレ何逆髪
とは姉宮かと。御驚き藁屋の戸を
あくれば　シテさも浅ましき御有様
ツレ互に手に手を取りかはし　シテ弟の
宮か　ツレ姉宮かと。同ともに御名を木綿
附の鳥も音をなく逢坂のせきあへ
ぬ御涙たがひに袖やしほるらん

クリ 地上　それ栴檀の二葉より香ばしといへり。
ましてや一樹の宿として。風たち
ばなの香をとめて花も連るる枝と
かや。○サシ 曲独吟　シテサシ上　遠くの浄蔵浄眼早離速離。
近くは又応神天皇の御子。難波の
皇子菟道の皇子と互に即位穏
儀の御志。皆これ連理の情とかや

シテ「さりながらこの兄弟の宿とも。思はざりしに藁屋の内の。一曲なくは、かくぞともいかで調の緒にひかれてこそ。寄るべの水の。浮からざりし契かな

シテ「世は末世に及ぶとても。日月の地に墜ちぬ。慣しとこそ思ひしに。我等いかなれば。皇子を出て

かゝるべかりし。人倫に交らで。雲居の空をも迷ひ来て都鄙を境の狂人路頭山林の賤となつて邊土旅人の憐みを頼むべかりあり。さるにても。昔は月まで。玉楼金殿の。床を磨きて玉衣の。袖ひきかへて今は又かゝる処の臥所とて。竹の柱に

竹の垣軒も樞も疎なる。藁屋の床は藁の窓。敷くとても藁蓆これぞ古の錦の褥なるべし

ツレ上 たまたまこと訪ふものとては嶺に木傳ふ猿の聲。袖をうるほす村雨の音にたぐへて琵琶の音を弾きならし弾きならし。我が音をもなく涙の雨だにも音せぬ藁屋の軒のひまびまに。時々月はもりながら。

上 目にも見る事の叶はねば。月にもうとく雨をだに聞かぬ藁屋の起臥を。思ひやられて痛はしや。

シテロンギ上 これまでなりやいつまでも。名残は更に盡きすまじ。暇申して蝉丸

ツレ上「一樹の陰の宿りして。それだにある
ましてげに。兄弟の宮の御別れ
とまるを思ひやり給へ　シテ上「げに痛
しやわれながら。行くは慰む方も
あり。留まるをこそと夕雲の立ち
やすらひて泣き居たり　ツレ上「あくや
関路の夕烏うかれ心のうば玉の

シテ「我が黒髪の飽かで行く　ツレ「別路と
めよ逢坂の　シテ「関の杉村過ぎ行
けば　ツレ「人声遠くなるままに
シテ「藁屋の軒に　ツレ「佇みて　聲にさら
ばよ常によ訪ならせ給へと　かすかな
聲のする程聞き送り見
置きて泣く泣く別れおはします

泣く泣く別れおはします

猩々概説

内十八巻ノ五

唐土金きむ山麓、楊子の里に一人の孝子あり、夢の告により市に出で、酒を賣りけるが、何處よりとも知らず來りて酒を飲む者の盃の數は重れども、面色の更に變らぬを怪み、名を問へば海底に住む猩々と答へて歸りけるより、一日潯陽の江にて待つ處に、猩々其の本體を現し來り、酒壺に泉をたゝへ、此の酒の泉は飲むとも汲むとも更に盡くることなしと言ひて、酌みては飲み、飲みては酌み、遂に眠り臥しけるが、猩々眠りさめて酒泉を見るに、依然として滿ちくゐけり。

此曲丸テ祝言ノ心ニテ朗ラカニ寛タカニ謡フベシ

役別		裝束附
ワキ	高風	着附厚板　白大口　側次　紋附腰帯　扇
シテ	猩々	面猩々　赤地金襴鉢巻　赤頭　着附赤地箔　緋大口 赤地唐織坪折　赤地縫紋腰帯　扇

季	九月	曲柄	切能
所	唐土周國潯陽之江羊畔ノ市	等級	五級

猩々

世阿彌元清作

平男内サラリ

これは唐土かね金山の麓。揚子の里に高風と申す民にて候。さてもわれ親に孝あるにより。ある夜不思議の夢を見る。揚子の市に出でて酒を賣るならば。富貴の身となるべしと。教のまゝにするわざの時去り時

まりけるにや。次第次第に富貴の
身となりて候。是に不思議なる
事の候。市毎に来り酒を飲む者の候
が。盃の数は重れども。面色は更に変
らず候程に。あまりに不審に候て名を
尋ねて候へば。海中に棲む猩々とかや
申し候程に。今日潯陽の江に出で。
かの猩々を待たばやと存じ候

上哥 ○切近囃子 拍子二合

潯陽の江のほとりにて。潯陽の江の
ほとりにて。菊をたたへて夜もすがら。
月の前にも友待つや。又傾くる盃の影
をたたへて待ち居たり。影をたたへて
待ち居たり

地上 下り羽

老いせぬや。老いせぬや。薬の名をも

○小謡

菊の水。盃も浮み出でゝ。友に逢ひぞ嬉しき。この友に逢ひぞ嬉しき。

シテ 御酒と聞く。御酒と聞く。名も理や秋風の。

地 吹けども吹けども。更に身には寒からじ

シテ 理や白菊の。

地 理や白菊の着せ綿を。温めて酒をいざや酌まうよ

シテ 客人も御覧ずらん。

地 月星の隈もなき。

シテ 所は潯陽の。

地 江のうちの酒宴。

シテ 猩々舞を舞はうよ。

地 蘆の葉の笛を吹き。波の鼓どうと打ち。

シテ 声澄み渡る浦風の。

地 秋の調べや残るらん

中之舞

シテ ありがたや御身心すなほなるにより。この壺に泉をたゝへ唯今返し與ふる

○仕舞

ありよもつきじ、よもつきじ、万代までの竹の葉の酒。酌めども盡きず。飲めども變らぬ秋の夜の盃。影も傾く入江にかれたつ足もとはよろよろと酔ひに臥したる枕の夢の。

○小謡

○覺むると思へば泉はそのまゝ。盡きせぬ宿こそめでたけれ。

159
1

版權所有
不許複製

大正十一年四月十日印刷
同　年四月十五日發行

訂正著作者　廿四世　觀世元滋

京都市上京區二條通麩屋町東北角
發行兼印刷者　檜常之助

東京市神田區錦町一丁目拾番地
發行所　檜大瓜

東京市四谷區傳馬町貳丁目
印刷所　江川堂

終